

再び万石浦へ

—少し先の将来に関わること—



【万石浦へ】

ゴールデンウィークが終わろうとする5月6日、石巻の万石浦へ向けて車を走らせました。ライオン学校の子どもたちはどうしているのでしょうか。

震災の直後、毎週顔を出していた頃は、それこそ子どもたち一人ひとりの顔が毎日浮かんでいたのに、被災した人々の生活が徐々に落ち着きを取り戻していくと、少しずつ万石浦へ支援に行く間隔もあき、やがてライオン学校を閉校してからは、それこそ、忘れてしまっていることの方が圧倒的に多いことにふと気づく時は、なにか申し訳ない気持ちになったりしておりました。

そんな私達に、一昨年一本の電話がありました。「神奈川へ遊びに行くから」。そして、3人の男の子たちが12月のクリスマスの頃、お小遣いを貯めて、新幹線に乗って遊びに来てくれたのです。彼らは、震災当時小学校4年生。そして神奈川に来てくれたときは、もう中学3年生。横浜や鎌倉を案内しました。たった3泊のお客さんでしたが、心に残った言葉がありました。

その一つは、ライオン学校に関してでした。彼らがいる前で、ライオン学校の通帳をそろそろ閉じる打ち合わせをしているのを聞いて、「なんか寂しいなあ。もう少し残しておいてもらえませんか？」というお願い。

そしてもう一つは、T男の言葉。「俺、大学には行けないと思う。震災で家もずいぶん傷んだし、オヤジも無理して体がよくないし、地元の水産工場に勤めるしかないと思う。」・・・そして、石巻に帰ってからのメールには、お礼の言葉とともにこう書かれていました。「神奈川にいる間、いろんなところをまわったけど、一番楽しかったのは、夜先生達に教わりながらみんなで勉強したことです。」

そうです。彼らはもう少し先の自分たちまで見守っていると聞いたかったに違いありません。3人が帰った後、そんな当たり前のことにやっと気がついたのです。

高校2年生になった彼らは、その少し先を今どんな風に生きようとしているのか。そして、それ以外のしばらく合っていない子どもたちはどうしているのだろうか。

だけど心の奥には、久しぶりに会う子どもたちが受け入れてくれるのだろうか・・・という不安にとらわれながら、久しぶりの石巻への道を車を走らせました。

【たぶん、就職決まると思う】

K子に出会ったのは、小6の春。学校でお漏らしをしたとか、避難所生活からかおむつを使っていて、なかなか身辺自立ができていませんでした。大学生のスタッフが、神奈川で1週間一緒に生活して自立訓練をすると、お漏らしもしないし、入浴もしっかりできました。しかし、自宅に帰ってしまうとまた元の状態に戻ってしまいました。

そんなK子は中学校で特別支援学級に在籍し、卒業後、特別支援学校に進学しました。今は3年生。必ず会って、様子を知りたいひとり！

行くことを連絡してあったので、移動中にメールをくれました。楽しみにしていたことが、とてもありがたく感じます。

会ってみてビックリ。その成長たるや、「刮目してまず見よ！」です。お昼がまだと

いうので、ファミレスで食事をしながら最近の様子を教えてもらいました。対応は自信にあふれていて、説明も無駄がありません。彼女が本来持っている力を、自分自身で引き出せるようになった・・・、そんな印象でした。

近くの工場に就職したいと思っていること。そこには「職業体験学習」で通っていること。立ちっぱなしだし、冬はとっても寒いし、冷たいし、大変だけど、頑張れると思う。パートの人たちも、親切に教えてくれる。学校はとっても楽しい、などなど。

様々なことを、彼女はひとつ飛びに跳び越えてしまったように思いました。それが人が成長するということなのだ、改めて気づかされました。小学校の時にのぞいた授業参観では、彼女は1時間中、じっと下を向いたまま一言も発することなく、ただひたすらそこにいることだけで精一杯、という様子でした。周りからはからかいの対象として、ライオン学校でも年下の男の子達に意地悪をされていました。本当はおしゃべりな彼女も、ただ黙るしかない学校生活だったのだと思います。

「よく話せるようになったね」という質問には、支援学校の先生が「自分の言いたいことは自分で言わないとダメって言って」「高校2年の頃から話すようになった」とのこと。新しい味方になる大人との出会いも、彼女の成長を手助けしているようで、高校進学を応援し、支援を続けた当時の大学生たちにも報告したい気持ちになりました。

【新たな心配】

突然家を訪ねてみたのはM男。彼は現在中学3年生。声をかけると、小さな男の子が玄関を開けてくれました。神奈川から来たことを告げると、奥からお父さんが顔を出してくれました。懐かしい。残念ながらM男は今部活に行っているとのこと。野球部で地区でも強く、強豪として夏の活躍が期待されていることなどを教えてくれました。そして、玄関を開けてくれた男の子は小学1年生。「あ、あの頃お母さんに抱かれていた、あの赤ちゃん?」。そうです、それだけの時間がもう経ったのです。この四月に小学校に上がったとのこと。M男とお母さんによろしく伝えてもらうようお願いして、辞去しました。



それから1時間ほど後、お母さんから電話がありました。「来てるっていうから、会いたくて、支援センターまで来たのだけど、どこにいるの?」支援センターは、ライオン学校の活動場所となっていた仮設の建物ですが、今も全く変わっていません。寒い冬でも、寝袋に泊まりながら、スタッフみんなで子どもたちの話をした場所です。変わらないのはここだけではありません、仮設の住宅だって、全くといっていいほど変わりません。ひょっとしたら、まだあれから時間が止まったままのところ、まだらに町の中に取り残されているのかもしれない。そんな支援センターに、私たちを探して向かってくれたのです。「お母さん、そこで待ってて。すぐに行くから」

お母さんとはすぐに会えました。向こうから手を振ってくれました。その手にはノー

トが握られています。M男のことは少し後回しで、お母さんは話し出しました。

1年生の男の子が、小学校に入学して一ヶ月経たないのに集団学習になじめないということで、一人だけで、先生がついて勉強したり行動したりしていると連絡帳に書かれていたこと。保育園では、何の問題もなくやってこられていたのに、先生からお母さんには何の相談もない中で進んでいることに不安を感じていること。個別指導を進められても、これからどうしたらよいのだろうか。

お母さんは手にしていた連絡帳を開いて見せながら、一息に話しました。そんな話し方に、戸惑いと不安が感じられます。誰かに聞いて欲しかったのでしょうか。それを私達に話してくれたことが、とても有り難く感じました。被災で傷ついた人や子どもたちのそばに可能な限り居よう。何ができなくても、そばに居ることだけはできるかもしれない。そんなライオン学校の目的を思い出していました。

慌てずに、ゆっくり答えを出していくこと。先生としっかり話し合ってみること。そんなアドバイスをして別れました。M男の部活の応援に戻るとのこと。あの当時、M男が夢遊病のように夜寝ぼけて歩き回ることを、本当に心配していたお母さん。今は、その当時赤ちゃんだった弟の心配事が降ってわいたように突きつけられて、休まる時がありません。さっきのように手を振ってくれるお母さんを車から見ながら、神奈川から様子を聞くだけでも電話をしようと思いました。

【俺、大学に行くよ！】

神奈川に来てくれた3人のうちの二人と会って、夕食をともにすることができました。どちらかというところ、小学校の頃は学級ではあまり目立たないタイプの二人。でも、中学を経て、高校2年生になった彼らは、どうやら、何枚も自分の殻を脱ぎ捨てて成長しているようです。



K男は小学校の頃から吹奏楽をやっていました。楽器はチューバ。体が大きく、チューバにはぴったりの体型。勉強も中学校でコツコツがんばり、地域で一番の進学校に入学しました。もちろん吹奏楽部でも活躍して、先輩を追い抜いて正式なメンバーとして活躍しています。小さい頃から好きだった、電車の学校への進学は、今は現実的でないと思っていて、国際関係の学部などを現在は考え中。派手ではないけど、堅実に自分の将来をつかみ取ろうとしているようです。

そして、T男。中3の時に神奈川に来たとき、「俺、大学には行けないと思う。近くの水産加工場で働く」と言っていたT男。「まだ諦めるなよ」とだけしか言ってあげられなかった私達。進路はどうするのでしょうか。

「俺、大学に行くよ。父ちゃんがいいって言ってくれた。」

どうやら、彼は学年でトップの成績らしい。トップがとれるよう、希望を少し落として、実力より下の高校を選んだのだとこと。学校は、T男に期待をしているようです。そんなことも手伝ってか、進路の面談で父親が大学進学を了解してくれたらしい。仙台のおばさんのところに下宿をしながら大学に通う計画らしい。また、部活でも大活躍。中学時代、卓球で県の上位にいたことは知っていました。小学校の時は野球をやっていたのだから、卓球で勝つことは、それこそ努力以外の何物でもありません。そして今また高校でも2年生ながら期待の選手のように。先輩が引退すればキャプテン候補？志

望の大学や学部もだいたい決まっています、模擬テストで、ずいぶんいい成績が出ているらしい。

話を聞きながら、ここまで彼をがんばらせているものはなんなのかが考えさせられました。ライオン学校で出会った小学校5年生の頃、なんかいつもすっきりしないで、いつもイライラしていました。人望もあり、力もあるのに、人前に出ることをいやがっていた彼。勉強はそれほどできる子どもでもなかったはず。家は津波で水につかり、大好きなおじいちゃんが亡くなり、家庭も落ち着かない。そんな状況を必死になって抱えているように見えました。ただ、T男は、弱いものにはとても優しい気持ちを持っている子でした。結果を残そうとするこのパワーと意志の強さは、いったいどこから来るものなのでしょうか。自分自身の未来をつかみ取ろうとするこのエネルギーは、何から生まれたのでしょうか。

彼は、話の最後にこう付け加えました。「でもさあ、ひょっとしたら、東京の方の大学の法学部を受けるかも知れない。そんな時は、校長とここにただで下宿させてもらおうと思ってるんだ。」

なんと有り難いことでしょうか。何年も会わない私達に、それでも迷うことなく期待してくれている。

「もちろん」！もう少し先の彼らに、私達は、今しばらく関わることを許されたのかも知れません。

もうこれ以上は食べられないというところまで焼き肉を食べ続け、二人はお腹をさすりながら笑っていました。

【まだまだライオン学校】

Y家では、家族のみんなに会えました。お母さんは、目を潤ませながら、来訪を喜んでくれました。子どもたちも、多くは話さなくても、その表情で再会を喜んでくれることが伝わってきます。男の子は背がとっても高くなり、高3のお姉ちゃんは大人びた様子です。

海から離れたところに家を建てて仮設を出たU家では、「この頃海のそばがなつかしくてねえ」というお父さんの言葉が印象的でした。

まだまだ、あのときのつながりは続いていることがしっかりとわかりました。ひょっとして、忘れていたのは、私達の方ではないのでしょうか。

ライオン学校の代表をK男が引き受けてくれ、通帳の名義人をK男とすることになりました。いつか、ライオン学校同窓会を開きたいねと、盛り上がりました。

■今回の支援のメンバー(2人) 柿本隆夫(大和市教育委員会)、清水睦美(日本女子大学)



NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

ホームページ <http://edventure.jp/>

★★★支援隊の大学生から受け継がれたライオン学校の通帳は、現在、万石浦の子どもたちの手元にあります。今後の子どもたち主導の活動のためにご支援ください★★★

ゆうちょ銀行 店名:〇五八店(ゼロゴハチ店) 店番:058

番号:普通3385189 ライオン学校(ライオンガッコウ)

※ゆうちょ銀行からの振込の場合 記号:10510 番号:33851891